

熙寧十年（一〇七七） 42 二月、京師に着き、四月、徐州の知事として赴任してのちの作。

和孔密州五絶

東欄梨花

孔密州の五絶に和す東欄の梨花



梨花淡白柳深青

梨花 淡白にして 柳 深青なり

柳絮飛時花滿城

柳絮 飛ぶ時 花城に滿つ

惆悵東欄二株雪

惆悵す 東欄 二株の雪

人生看得幾清明

人生 幾たびの清明をか看得ん

【語句】○孔密州：蘇軾の後任として密州の知事となった孔宗翰。字は周翰。孔子四十五代の孫の孔道輔の子（宋史卷二九七）。蘇軾の詩集中卷十四から十六に亘

って交游の詩がみえる。○東欄：東の欄干（てすり）。密州の官舎の。○花滿城：劉禹錫の詩に「長安二月花城に滿つ」（傷秦妹行、集卷十）○惆悵：いたみかなしむ。疊韻の語。○二株雪：二を一としてゐる本もある。韓愈の詩に「馬を城西に走せて惆悵して歸る。忍びず千株の雪相映ずるに」（寒食の日出で遊ぶ、集卷二）

これは李花。同じくまた「聞道く郭西千樹の雪」（梨花の開くを聞き、劉師命に贈る 集卷九）。○看得：この得は口語的な用法で、動詞のあとに、軽くついて、さしさわりなく可能であることをあらわす。見ることができ。なお看は看守る見かた。○清明：二十四節氣の一。杜牧の詩に「清明の時節雨紛紛、路上の行人魂断えんとす」

【解釈】梨の花はほんのり白く咲き、柳のみどりはみるみる深まる。やがて柳絮が飛びはじめ頃、密州のまちは花ですっかりうずまってしまう。庭の東の欄干のそばに、雪かと思まがうばかりに白く咲きにおう、ふたもとの梨の樹を眺めつつ、もの思いに沈む。人の一生には幾たびこの清明の佳節に会うことができるのであろうか。

「蘇軾」近藤光男より抄出